
東方双翼想

津軽 あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方双翼想

【Nコード】

N3170Q

【作者名】

津軽 あまに

【あらすじ】

時は永夜の物語から少し後。

死を持たぬ少女の炎に圧倒される、「普通の魔法使い」霧雨魔理沙。

彼女は圧倒的な攻勢に薄れる意識の中、かつての記憶を呼び起す。

それは霧雨の魔法使いのハジマリの日。

彼女がまだ、自分の翼で羽ばたけないほど幼かった頃の物語だった。

東方Project二次創作SS。霧雨魔理沙の過去話系物語で
す。

不死「火の鳥 - 鳳翼天翔 -」（前書き）

本作は、ZUN様の作品である「東方Project」の二次創作SSであり、かつ、IOSYS様の作品である「東方萃翠酒酔」収録曲のムービー「二つの翼」の三次創作SSです。

作品の独自解釈、独自設定、原作キャラ崩壊、ご都合主義、チート能力等が含まれていますので御注意下さい。

不死「火の鳥 - 鳳翼天翔」

右手に魔法を。

左手に箒を。

後ろに倒れた知り合いを。

前に、炎の翼を背負う不死身の少女を。

闇夜を昼に変える光を帯びた三羽鳳凰が舞う。

圧倒的な力。

蹂躪されるだけの脆い体。

まったく、どんな反則だろうか。

こちらはただ一撃で失神するのに対して、眼前のそれは野を灰燼と貸す魔法を幾度喰らっても蘇る超人なのだ。

一羽目の鳳凰の翼を箒の加速で避ける。

二羽目の鳳凰の尾を魔砲の反動でやり過ごす。

だが、そこまで。

三羽目の鳳凰の嘴が胸元を抉り。

ぞぶり。

赤い輝きが視界を覆い尽くした。

勝てない。

勝てるはずがない。

そも。

後ろで倒れている二人のような異能など、自分には存在しない。

時間を止める魔眼もなく。

世界の境界を定める結界もなく。

空一つを飛ぶのにも、こんな箒の力を借りねばならない。

正真正銘、ただの人間。

足先から頭の天辺まで、もうどこにも絶対的な異能などない身に、不死のバケモノが倒せるはずもない。

『でも』

それなのに。

『おまえは知るべきだ』

どうしてこんなときに。

『おまえが侮った人間こそ、おまえを打倒できる唯一の存在である
つて』

そんな昔の言葉を思い出してしまうのだろうか。

『おまえが最強を望むのなら。おまえが選ぶべきはただ一つ……』

あの日。あのハジマリの戦いの最中。

自分は……霧雨の魔法使いは、一体何を口にしたのだったか……。

木符「朝露球天」

少女はぺこりと頭を下げると、白の袖で濡れた唇を拭った。
薔薇の唇の間から漏れた唾液を小さな舌が舐めあげる。

奪術「

」は、この術を所有術式「音

符「モウニングベル」」より高位と認識します。

篡奪を開始しますか？

是。

術式複写に必要な容量が足りません。

優先順位の低い術から順に現存術式を消去し、術式複写に
必要な容量を確保しますか？

是。

消去を開始します。

音符「モウニングベルの共鳴」 消去。

木符「朝露球天」 回路複写完了。

体内に取り込んだモノの性質を舌で確かめると、少女は足元に目
をやった。

彼女の視線の先には、倒れ伏す女性。腕一面が鱗に覆われている
ことを除けば、誰もが認める美女である。

女は口をぱくぱくと広げながら、荒い息をついている。
女の正体は水妖。符術でもって周囲に水の膜を展開し、地上で生
き延びていた妖怪。

この幻想境でも名の知られた「はみでもの」の一人。

だが、その彼女が今は、陸に上がった魚さながらにもがき苦しんでいる。

さて、どうしたものか。

少女は小首を傾げた。

檻の中では、敵は殺すものだと思っていた。

だが同時に、敵とは自分を殺そうとするモノだと聞いていた。

その定義から言えば、目の前にいるのは敵ではない。

対象が自分に対して放ったのは、敵性の術式ではあったが、それは自分を殺そうとするものではなかった。

意識を刈り取り、魔力を奪うことを目的としただけの術式。

それは、ラボで行われていた訓練用のプログラムとよく似ていた。敵でないものを無力化した後の行動について、彼女は有効な手段を教えられていない。

与えられた優先すべき指令に関係する行動は、もう全て果たしている。

ならば。

判断を保留。対象を放置する。

それが、主を失った試作型自律魔術兵装の下した判断だった。けふつ、と小さな満足の息を吐く。

そして、思い出したように、指先で小さな印を組んだ。

「木符「朝露球天」」

右に展開したるは、陰陽系の符術。東方土着の五行流転式から発展したこの島国では最もポピュラーな術式だ。

符が弾け、虚空から現れた水の流れが倒れた女を包み込む。

やがて、水は檻となり、女を包み込んだ。だが、その中で女に苦しそうな様子は見られない。

恨めしげな目を少女に向けるも、先ほどまでの息苦しい様は消えていた。

「食事の後片付けはきれいにしないとね。残骸が醜く残るのは美しくないわ」

「盗人が……」

「悔しい？ 自分の術が自分に使われるのは」

「……」

「暴れたければいいけれど。でも、符術以外を使って暴れたら、幻想境にはいられなくなっちゃうものね」

言葉を失う女に、少女は興味を失ったように左手の符を発動させる。

「 風符「シルフィードの跳踊」」

それは、陰陽系の符術ではなかった。西方伝統の四元素変換式から発展した錬金系の符術。

符術を知る者にとって、その光景は何かの冗談にしか見えなかったらう。

陰陽系と錬金系の符術は同一の術者に行使されることはありえない。

それは、東方と西方という術式の由来の違いから来るものではなく、前提となる理論が全く異なるからである。

五行流転式とは、文字通り万物の変化と差異を五行の流転から説明づけ、世界を変容させる術式である。

対して、四元素変換式は万物の変化と差異を、四元素の配合比率の変化で説明づけ、世の理を捻じ曲げる術。

符術とは、自分の望む世界法則を式として魂に刻み、符に複写して世界に転写するもの。

霊力・妖力・魔力を通すことで、世界を変容させる誓約。

異能の力を使った決闘に意味と美の枠を嵌めて具現化したもので

ある。

意味と美。

それは、術者の意思にてある物理法則ルールを確信し、強弁することで世界に法則を誤認させる術。

そう。それはあくまでそれは捻じ曲げられた自然現象。

直接魔力や妖力を行使すれば自然法則は混乱し、博霊の大結界も揺らぎかねない。

だが、捻じ曲げられたとはいえ、あくまで自然現象であればその大筋を捻じ曲げられるぬ。

故に、幻想境においては、あらゆる騒動がこの符術を用いた争いによつて解決される。

そうでなければ、はみでもの達の楽園であるこの世界は容易に壊れてしまうからである。

それは、外世界において遙か未来に大国間で結ばれることになる、ある反応兵器の使用を禁じる動きに似ている。

使えば住みよい世界が減びるとわかっているならば、どれほどそれが強力だろうと他の力を使わざるを得ない。

閑話休題。

ともあれ、符術とはある法則を確信することで行使できるもの。

故に、一人の術者はある特定のルールから連想できる派生術式しか行使できない。

天動説と地動説を同時に真実であると確信することが困難であるように。

五行と四元素を同時に確信する……少なくとも、世界を捻じ曲げるほどに……ことは、事実上不可能なのである。

だが。

ドレスの少女は、それをなんなくやってのけた。

「んじゃね、お姉さん。今度は別の友達エサを連れてきてね」

水の檻が異空間への移動を始める間際。

「そこまでだ、ルーキー」

黒の衣装と三角帽子。

右手には護符。左手に箒。

「楽しそうだな。混ぜてくれないか」

昔話に出てくるようなステレオタイプの魔法使いが、森の奥から現れた。

狂符「三月ウサギの疾駆」

それは、どこからどう見てもただの人間だった。

幾ばくかは妖めいた気配も感じるが、感じられるプレッシャーも大したものではない。

今まで出会ったバケモノ達と比べれば、取るに足らない小物。

そう、少女は目の前の魔法使いを値踏みした。だが。

「ふむ。そうか、そういう能力を持っているんじゃない、スペルカードルールじゃ敵なしくてわけだな」

聞き捨てならないことをそれは当たり前のように口にした。

「どうということ？」

詳しい情報は込めずに聞き返す。

先ほどの戦いの最中でも、彼女は自分の戦いを監視している目を感じなかった。

彼女の能力は看破されたところで死角などない。

が、戦闘覚醒時の感知能力を掻い潜る隠密能力を持っている相手は厄介だ。

「ああ、安心しなよ。こっちはこそこそするのは苦手だね。そこの人魚姫と戦ってるのを眺めてたわけじゃない。ただ、商売柄、道具の目利きが得意ってだけさ」

ふ、と魔法使いの姿が掻き消え、篝が一閃する。

周囲に展開していた感知結界が接近を告げ、少女は水符を解除した。

ぶつかり合う防御壁と筭。

「お見事」

「速いわね。けど、スペルカードを使わないのかしら？」

「ほら。一対一に邪魔が入るのは嫌だろう？」

解放された人魚を背にして、魔法使いは口元を歪めた。

腰の袋から瓶を取り出すと、地面に叩きつける。

朦々と立ち込める霧。

白の煙幕が消えたとき、そこには人魚姫の姿どころか魔力の痕跡すら残っていなかった。

「優しいのね、この偽善者」

白の少女が両の手を掲げ。

「易しいからね、この程度」

黒の魔法使いが筭を構え。

「じゃあ始めましょうか、魔法使い」

「ああ、初めましてだな、魔符喰い」

少女の腕に力がこもる。

やはり、この相手は自分の能力を理解している。

調整途中で放り出された少女にあるのは、術を篡奪する程度の能力。

他者の術を、それを為すため魂に刻み込まれた術式ごと奪い取る異能。

無論、人間の魂の持ちうる許容量などたかが知れているわけで、無限に術を増やすことは不可能だ。

もしも容量が一杯になった場合、より下位の術を用いるための術式が消去され、高位の術が上書きされる。

戦いを経験することに強力な術を奪い取り、進化する。

これだけでも強力なこの能力の真価は、また別のところにある。つまり。

術を強奪するということは。

相手の術を使えるようにし、かつ、相手は術を使えない状態とすること、である。

術を模写ないし反射する呪詛返しと永続的な術封じの複合。

それは、魔術戦における切り札。問答無用の掟破りである。

魔術に頼るものはそれを封じられ。

魔術を知らぬ者は魔に翻弄される。

故に無敵。

故に無敗。

それが、西方結界外辺域で製造された自律型概念兵装693号、通称「悪意悲劇」の性能であった。

篡奪した呪符を検索する。

大型術式は温存。

相手の能力が理解できない以上、消費魔力の少ない符で敵対対象の性能を把握するのが適切と判断。

狂符「三月ウサギの疾駆」。

右に雄兎。左に雌兎。つがいを象った魔塊が交わり、六の魔塊を生み出す。

六の魔塊は魔法使いに迫りつつ三のつがいを作り、それぞれがさらに六ずつの魔塊を生む。

増殖につぐ増殖。盛りのついた獣の乱舞。繁殖という名の暴食。一つ一つは人間の拳撃程度の力しか持たない。だが、それとて無数に集まれば圧倒的な暴力となる。

始原の二が百たるまで都合五秒。分裂の途中こそ弱点のこの符を前に、魔法使いは微動だにしない。ならばこれで終わり。

この符は隙こそ大きいが、相手が対処を誤れば瞬間に手ひどい破壊を生み出す術となる。

「安心して。殺しはしない。ただ、あなたのなけなしの術……」

一瞥。無軌道に増殖していた圧倒的な弾幕に、指向性を与える。

「すべていただくわ！」

空間を見る間に埋め尽くす魔鬼の群れが魔法使いを蹂躪する。避けられるはずがない。打ち落とせる数でもない。絶対命中の弾幕が黒の魔法使いを押し隠す。

なのに。

どうして。

この手には、弾幕が命中したときの手応えが存在しないのか。

「うそ」

狂符「三月ウサギの疾駆」。

攻略法のセオリーはただ一つ。多重増殖を展開している間に術者に接近し、弾幕を抜けること。

しかし。目の前の魔法使いは、その確実にして唯一とも言える対抗手段を無視し。

それでもなお、無傷で微動だにせず立っていた。

「ああ、殺さない、か。確かに」

魔法使いの大きな帽子。

目元は隠れて見えないが、つばの陰から覗く口元が大きく歪められた。

「人一人殺せないな、おまえ」

許さない。こちらの初手を避けた程度で、その大口。

少女は誓う。この屈辱。絶対の後悔と屈辱で、返礼すると。

王符「荒火徒神」

「これは忠告だ、魔符喰い。オレを倒そうと思うなら、術を奪うなんて余裕は見せない方がいい」

魔法使いの懐から取り出される魔符。

「これは警告よ、魔法使い。私に勝ちたいと思うなら、わざと刺激して本気を出させない方がいい」

魔符喰いの右の手に生まれ出る盗符。

二度。互いの符が意思に従い展開される。

魔符喰いの符は炎を生む。

単純に、簡潔に、破壊のためだけに生み出される青の火群。

先ほどの狂符のように数に頼るのではない。

あらゆるものを一にて灰燼に帰する劫火。

それは意思ある獣の形をとって、対象の生命を喰らうべく踊る殺意となる。

王符「荒火徒神」。

幻想境でも無二の獣人から篡奪した、ある歴史の具現。

肉体の枷から解き放たれた靈性による、一方的な断罪行為。

さきほどの回避行動から、相手の切り札は「速度」だと理解したならば、それをも上回る最速の符で、捻じ伏せる。

肉体の檻に囚われた魔力と、肉体の枷が外れた靈力。どちらが速さで上回るかなど言うまでもない。

魔術師は動いていない。微動だにせず。ただ、符に魔力を込めている。

奢るか。だが、それが命取り。
今度こそ、相手の四肢を焼き、無力化するための炎を解放する。
一にして無限。残像が視界を焼き、振るわれる暴力は高速を超えて光速に近い。
ならば。

その符が周囲を焦土と化した後も、口元を歪めて立ちはだかる魔法使いの速度を、何と形容するべきか。

「遅いな」

一瞬の驚愕。

その隙を縫うようにして。

光の針が少女の胸を貫いた。

白みかけた意識が瞬時に再生する。

薬符「黄泉左還法」。

正体不明の医者から奪い取った自動治癒符の効果である。

「やっぱり簡単には終わらないか。面倒だな、まったく」

いや、面倒であるとかないとか。そもそもそういった言葉すら、本来なら筋違いだ。

今の符は、幻想境でも随一の使い手から奪い取った秘術。
改めて相手に目を凝らす。

魔法使いは人間だ。種としての魔法使いに昇華すらしていない。
ただ、数が多いことだけが種の力である、それだけの存在だ。
妖怪、幽霊、獣人、あらゆる強大な種から、強力な符を篡奪してきた自分が。

こんな矮小な存在に傷一つつけられないなどと。

「貴方、何様のつもりよ」

「通りすがりのイカサマさ」

戦いは一方的だった。

音波で対象を幻惑する符も。

質量で相手を圧殺する符も。

事象の崩壊を招く禁弾符も。

どれ一つとして魔法使いの笑顔を崩さない。

少女の思考は五里霧中。掠り傷さえつけられない。

相手の符術は百発百中。光の弾が幾度も身を撃つ。

そう。魔法使いは動いていない。

最初に立っていたところから、微動だにしていなかったかのようにすら見える。

まるで、そこを攻撃がすり抜けたかのように。

こちらの攻撃は霧雨のように手ごたえなく。

しかしあちらの攻撃は霧雨のように少しずつこの身を濡らし、染み込んでいく。

どうして。

複雑に練られ、命中させることに特化した術は魔法使いを捕らえずに。

相手の単純に直線しかしない光の矢は、一方的に自分に命中するの
か。

「あ」

光の矢の作成。

それは言い換えれば、光の屈折率を制御する術式といえる。

「なるほど。そういうことだったのね」

少女の中で、ようやく疑念が晴れる。

魔法使いの攻撃手段は光。

光を収束させ、一点に集中させて貫く魔術。

ならば、それが防御に応用できない理由が、どこにあるだろうか？

自然光を物理的な破壊力をもたらす光線に変えるには、屈折率の制御、光そのものの操作等の介入が必要。

つまりそれを応用するならば。

別の場所にいる存在を、あたかもそこにいるように見せる虚気楼の創造も可能だ。

虚空に無から光を織り上げて幻像を作り出すことすら可能であるう。

そう考えれば、一見直線にしか向かわない単純な攻撃が自身に命中し続けてきたことにも納得がいく。

おそらくは、軌道の屈折や光線の不可視化といったことを密かに行っていたということ。

素晴らしい。

何という汎用性。

数十の符術を強奪し、駆使する今の自分と拮抗する一つの術。

それは、なんて

「おいしそう」

自己進化こそが彼女に与えられた命題。

成長は生存と同義。なれば、力を求める欲求は少女にとって食欲に等しい。

その欲を最大限に満たす獲物を前に、彼女は小さな舌で唇を濡らす。

篡奪したる中より掲げる新たな符。

「ま、お説教はお遊戯が終わったらだ。来いよ、自称道具さん」

絶対の自信。それが崩れるところを想像して、魔符喰いは身震いする。

対象の近接戦闘能力は決した高くないことは今までの攻防で理解した。

相手の術の性質はおおよそ予測できた。なれば、後は食事に取り掛かるのみ。

周囲に巻き起こる風。

「ああ、認めるわ、魔法使い。貴方の言うことの意味はわかる気もないけど」

風符「シルフィードの跳踊」。

「今の私じゃ、貴方になわなない。ただ」

風精の流れに介入し、そこに存在するはずだった大気とある物質の位置を瞬間的に入れ替える符。

本来ならば対象の不意を突いて次の符による攻撃を確実に命中させるための繋ぎでしかない術。

その行使によって、少女は一瞬にして、魔法使いの眼前に迫っていた。

「その術、いただいたらどうなるかしら？」

「っ」

肘を固定し、腕の自由を奪って拘束する。

見ようによつては、恋人同士が抱き合っているようにも見えなくない光景。

だが、それこそ少女の必勝の型。

「そう。貴方の術でも触覚までは騙せない。もう逃げられないわ、霧雨の魔法使いさん」

桜色の唇を一度だけ舐めあげ。

「いただきます」

嫣然たる微笑。

薔薇の唇が重ねられ。

「奪術「マリス・インザミラー」」

少女は、霧雨の魔法使いの術を強奪した。

奪術「マリス・インザミラー」

奪術「マリス・インザミラー」は、この術を所有術式のいずれより高位と認識します。

篡奪を開始しますか？

是。

術式複写に必要な容量が足りません。

優先順位の低い術から順に現存術式を消去し、術式複写に必要な容量を確保しますか？

是。

消去を開始します。

精緻なる術式。

練り上げられた回路が体内に流れ込む。

彼女にとって、その術式の性質は味として認知される。

それは美味。あまりに複雑過ぎてその成分まで判別は不可能。

ただ、気が遠くなるほどの技巧がこらされた料理であることは理解できた。

獣符「三月ウサギの疾駆」 消去。

木符「朝露球天」 消去。

「二つの術式を消去してもなお容量が確保できない。よっぽど練り上げられた術式なのね、貴方の技は」

風符「シルフィードの跳踊」 消去。

光符「極光のキリエ」 消去。

わずかに少女の表情に苛立ちが浮かぶ。

まだ足りないのか。どれだけの容量が必要なのだ、この術は。

下級・中級術式を全て消去しなお、容量確保のための処理は継続されていく。

詐符「ジルドレの憂鬱」 消去。

王符「荒火徒神」 消去。

癒符「黄泉左還法」 消去。

「何、これ……………」

ようやく、明確にその異常に気づく。

今消去されているのはいずれも、一級の魔術師・妖怪が十年単位で練り上げた術式である。

それを全て抹消してなおまだ足りぬ術式とは、どのようなものか。

焦燥。だが、その処理を止めることはできない。

処理を停止すべきか？

否。全ての術式を失い、新たな術式を獲得もできなかった無力な少女が一人残るのみだ。

そもそも、この術に術の篡奪を止める機能などない。

自己進化こそを命題とする彼女の機能は、新たな術の獲得を阻むその指令を棄却する。

かくてなお、消去は続いていく。

宝具「両儀印」 消去。

幻符「夢幻の賢聖」 消去。

星符「確約されし贖罪の穂先」 消去。

冥符「『獣』」 消去。

それで、全て。

全16術式全て。彼女がその生涯の中で強奪してきた最強の術式
全ての消去が完了した。

「まあ、いいわ。それで、全てを超えた最強の術が手に入る……
……」

自分自身を納得させようと口に出した言葉は、だが、すぐに内なる声遮られた。

容量不足。消去を、続行します。

その言葉の意味を、少女は理解できなかった。

もう、何もない。

消すべき術など。残された術式など、何一つとして……

奪術「マリス・インザミラー」 消去。

あつた。

最後、自分に残されていた術式。

自分を自分たらしめていた術式。

それが、消えた。

全てを写し取る符は、その役目に忠実であるが故に自分をも消去した。

容量確保完了。篡奪を開始します。

篡奪完了と共に、本符はその機能を停止します。

無機質な声が脳内に響き渡った。

魔砲使い「霧雨 魔理沙」

「生憎こつちは暇人でね。とあるねぼすけな大妖怪を真似て、時間だけはかけて練り上げた術式だ。おまえの言うところの「容量」とやらの無駄な大きさは折り紙つきだろう」

いつの間に振り払われたのか。

距離を取り直した魔法使いの言葉に、意識が現実へと引き戻される。

「術を奪われるというのは、そういうことだ。己が己として生きるために培ってきた、生の具現にして痕跡。生の証にして誇り。意思の具象」

それならば、どうして。

自分の力全てを奪われてなお。

彼は、そんなに堂々と笑っていられるのか。

「悔しいかい？ 空しいかい？ 憎いかい？ それが、おまえにかされた者達の怨念というわけだ」

どうしてなお。

その戦意は、折れていないのか。

「さあ。第二幕といこうか。おしおきの時間だ」

「強がらないで。確かに「マリス・インザミラー」は消えたけど。

貴方は符術を失い、私は貴方の術が使えるのよ？」

「それで？」

「貴方は私に捻り潰されるしかない。ヒトを殺すのは初めてだけど

……貴方は、逃がさない」

「ほう」

「私をバカにした報い、自分の術で受けなさい！」

ただ二つ。

篡奪した符の術式を精査する。

「あれ？」

だが。

そこにあるのは。

世界に満ちる光を操る術式ではなかった。

信じられない。

こんな術式で。

どうやって、目の前の男は、自分を圧倒できたというのか。

黒の魔法使いが嗤う。

「どうだい、僕の術は？」

男の口調が変わった。

無鉄砲を思わせるそれから、理性的なそれへと。

だが、そんな違和感よりも、少女には確かめるべきことがあった。奪い取ったの術の性能。精査の結果理解できたもの、それだけであるはずがない。

使ってみて初めて理解できる何かがあるはずだ。

すぐるように念じ、少女は符を起動する。

念に従い、奔流が全身を疾駆する。

確かに。術を起動することで、彼女はこの符の全容を理解した。

そして、術を解放することで、彼女は致命的な誤解を自覚した。

この術は、「光を操作する」なんて上品なものではなく。ただ一途に。

全ての力を一点に収束させ。

一心不乱に想いを貫くだけの術。

ああ、それは全くある感情に似て。

それ故、この符は名づけられたる。

「……………符」

確信する。

確かに、この符は最高に複雑な術式だ。

けれど。これは、絶対に。

最強の符ではありえない。

「『！』」

絶対の破壊が視界を覆う。強力無比。夢想しうる無双の威力。

だが、それは。万が一、命中すればの話。

「それで？」

声は、背後から聞こえた。

「おまえは勘違いをした。僕の強さを、おまえは符術スベルの力だと思っ
込んだ」

完璧なまでに、その攻撃は回避されていた。

「それが間違いだ。こちらの回避率。命中率。それを、術を奪えば

再現できると思っていた。けれど。僕の術はそんな小器用じゃない。「速く動く」と「真つ直ぐ貫く」。その程度の能力だ」

「う……そ」

「理解したかい？　これまでおまえを圧倒していたのは、符術スベルじゃない。ただの技術スキルってことだよ」

先を読み、法則を理解し、すばやく避け、正確に狙って当てる。そんな単純な戦法に、無数の符が負けているなどと思ひもしなかつた。

相手の符の性能が上回るが故の劣勢と錯覚した。それが、少女の敗因。

術を奪わせることこそ、この相手の仕掛けた罠。

であるとすれば、術を奪うまでの考えなしを思わせる口調は、その策を気取らせないためのものか。

羞恥と屈辱で思考が白くなる。

淡々とした魔法使いの口調が、耐えられないほど腹立たしかった。

「もう一度言つよ。第二幕。ここからは、一方的なおしおきの時間だ」

だが。多くの符を失った少女と同じく、相手とて弱体化してはい

る。高速飛行による移動力は失い。さらには、唯一つの攻撃能力であった、光の矢を作り出す符は奪われている。

もしも少女に今まで奪ってきた優秀な攻撃用符が残っていれば、難なく倒せる相手である。

いや、優秀さという点で語るなら。

実に、篡奪した術式は、よく練り上げられた術だった。

寸分の狂いもなく直進し、一分の揺れもなく意図した地点で破壊を止める。

ひたすらに疾く、ひたすらに凶悪な破壊力を誇る。
だが、それだけ。

他の術式にありがちな、「当てる」ために割かれた式が一切存在しない。

一般に、魔術を使うものは戦闘者ではない。

故に、素人が用いても達人に命中するよう、攻撃用符術は「命中」のための機構にその式の多くが費やされる。

すなわち「追尾」か「弹幕」か。

だが、この符はその対極。

攻撃力は申し分ないが、当たるか否かは本人の技量次第。

回避に用いられていた「高速移動」の術もまた同様。

ただ速く動けるだけで攻撃は避けられない。

むしろ、目が追いつかなければ無造作にばらまかれた弹幕に自分から飛び込んでいくことになりかねない。

「で、でも……貴方にはもう攻撃手段なんて」

「あるさ。腰から抜かせてもらったよ。初めて見る道具だが……僕は道具の目利きが得意だね。

こいつの特性が僕の魔法に似ていることくらい理解できる。ついでに言えば、その使い方もね」

いつの間にか。

魔法使いの手には、黒光りする鉄の塊があった。

少女が幻想境の外からやってきた証にして、魔術の天敵たる文明の利器。

弾避けの魔術も失った今、それは容赦なく己を穿つだろう。

「ああ」

勝てない。

負けるはずなどなかったのに。

相手には、自分ほどの異能など、存在しなかったというのに。術を奪う唇もなく。

空一つを飛ぶのにも、あんな^{トウク}篤の力を借りねばならない。

人間に毛が生えた程度の、ほとんど何の異能もない存在。

手には、たった二つ練り上げただけの単純な術式。

足先から頭の天辺まで、もうどこにも絶対的な異能なんてない存在に、どうして自分を打倒できたのか。

「わからないって顔をしてるが。おまえは知るべきだ」

銃を構え。

帽子を取って。

黒の魔法使いがやってくる。

「おまえが侮った人間こそ、^{オマエ}道具を打倒しうる唯一の存在であるってことを」

ああ、これで終わり。

戦闘の果てがどういうものか、造られた頃から聞かされていた。それが、自分にも訪れるだけ。

「まあ、混じりものの僕が言うのもおこがましいかもしれないが…

…」

機能を果たさなくなった道具が、ただ捨てられ、壊されるだけのこと。

たった、それだけのことなのに。どうして。

人間のようには、この視界は潤み、震えているというのか。

「おまえが最強を望むのなら」

銃口が向けられる。

長身の魔法使いと、膝を突いた少女。

魔符喰いと呼ばれた彼女から、魔法使いの表情は逆光で伺えない。ただ、無慈悲な鉄の塊が、己の脳を狙っていることだけは理解できる。

「おまえが選ぶべきはただ一つ」

きつと、自分を自分たらしめていた機能スベルを失ったことで、自分は壊れてしまったのだろう。

だから、こんな人のような感情を持つてしまったのだ。

自分は、どこで間違ってしまったのかなんて。

まだ自分は死にたくない、なんて。

そんな、人間臭い思考をしてしまったのだ。

マリスミゼリア
悪意悲劇。

それは、赤ん坊の頃、両親につけられた人間としての名の代わりに、自分の身体を弄繰り回した者たちに名付けられた、彼女の道具としての名称。

なんて名前に相応しい、悪意に満ちた悲劇の類だろう。

壊れた道具は、遠く異郷で壊されましたとさ。どんとはね。

せめて自分を殺す相手の顔くらいは、最後に刻まんと、少女は上を向く。

男は、まだ幼さを残した顔立ちをしていた。

銀の髪が、風にさらりと揺れ。

彼女は、信じられないものを見た。

「借り物じゃない。自分の翼チカラで飛ぶ、普通サイキョウの人間に、なりなさい」

少年の手から、無造作に放り捨てられた銃と。
まるで、兄が妹に向けるかのような、無造作な笑顔。

「なに、僕は道具屋見習いだ。必要な環境は、全部僕が紹介しよう」

それが、西方外域で製造された「悪意悲劇」マリスミゼラという名の道具が、
最後に見た光景であり。

後に東方世界で活躍する魔砲使い、霧雨魔理沙という名の人間が、
最初に見た光景だった。

恋符「マスタースパーク」

意識が、覚醒する。

口の中に鉄の匂いが充満していた。

反射的に護符でも使ったのか、挟られたはずの胸は平坦ながらも存在していた。

箒にまたがり、眼前には炎の翼をはためかせる不死身の少女。

走馬灯が巡るといふやつか、一瞬のうちに昔の夢を見ていたらしい。

一つの道具が壊れ、一人の人間が生まれた日。

最強の道具が停止し、最強を目指す最弱の小娘が歩き出した日。

すっかり忘れていた。

あの異能^{スベル}だらけの化け物に打ち勝った、磨きぬかれた技巧^{スキル}。

時間を止める眼力。

時空を歪める結界。

そんなものは必要ない。

道具でなく、人間である霧雨 魔理沙が頼るのは、五感と肉体に刻み込んだ技巧。

そして何より、無力であるからこそ、臆病であるからこそ、危険に敏感な嗅覚。

指から手首。手首から肘。力を込める。

まだ動く。まだ戦える。

まだ何一つ折れていない。

腕も。脚も。箒も。心も。

そして何より。

箒飛行。直線を貫く光。使いにくく不器用な魔術。

あの日彼からもらった、その二つの翼も、確かにこの胸にある。
なら、退かない。退く理由がない。退く気など欠片もありはしない。

「ああ……わたしとしたことがドジっちまったぜ」

彼のくれた箒で身を支え。

彼のくれた帽子をかぶる。

彼のくれた笑顔を真似て。

彼のくれた魔法を振るう。

ノンディレクショナルレーザー。

威力はさほどでもないが、視界全体を照らす光条を放つ。

奪術による模写ではない。

知人の引きこもり魔術師の術式を解析し、その呼吸を模倣した物
ドコピ
真似だった。

時間をかけた割に、本家と比べれば貧弱で粗雑な再現。

それでも、無駄な努力で練り上げたその技は、道具であることを
捨てた人間、霧雨魔理沙の象徴だ。

光がその身を焼くのも厭わず、相手は動じる様子も見せず符を掲
げる。

まあ、そうだろう。無限再生の不死身怪人に、この程度は痛くも
ないはずだ。

だが。攻撃として意味がなくとも、視界を覆われては敵も広域攻
撃符を起動せざるを得ない。

白の髪を翻し、不死身の少女が爪だけの怪物を召還する。

虚符「ウー」。

そのカードは、もう既に一度見ていた。

時間使いのメイドを叩きのめした、空間を喰らうトウチャオ、土精の爪。

三本の斬撃の軌跡は、空間にヒビを入れ、無数の断裂を作り出して拡散する。

無軌道にして無数。回避は困難。

身体だけを守ればいい他の二人と違い、霧雨魔理沙は、箒をも守らねば地面に激突死が待っている。

長い箒では、亀裂のわずかな隙間に身を潜らせることは不可能。

故に、霧雨魔理沙が箒に執着する限りにおいて、これで済み。

だが。

逆に言うならば。

手にした箒さえ捨てれば、彼女は、その攻撃を避けきれるということ。

箒の上に立ち上がり。

懐から八角形の増幅符を取り出す。

銀色の魔法使いが、魔法使いをやめてから自分のために作ってくれたもの。

加速の術を最大まで増強し、少女が跳躍する。

落ちれば死あるのみ。

その高さで、躊躇もなく霧雨魔理沙は虚空に身を躍らせる。

腰を捻り、三本の爪の「間」に、全身を捻じ入れる。

三本の爪から派生する空間断裂は爪の軌跡の「外側」に展開する。ならば、爪の内側に入り込めば、避けるべき断裂は単純に、格段

に少なくなるということ。

無力で臆病であるが故の、危険への嗅覚。

人として限界まで研ぎ澄ませた戦術理解が生んだ、あまりに無謀で確実な弾幕回避。

驚きの声は不死身の少女。

身を縮めて空間の亀裂をくぐり、迫ってくる魔砲使い。

なぜ。アレは、悪魔の使いや巫女と違って、生身で空を飛べないのではなかったか。

広域攻撃符の使用後には、達人であろうとも隙が生じる。

強力な性能の代償。その一瞬を、魔砲使いは満面の笑みで挟らんとする。

能力スベルの性能の差があるならば、技術スベルの練磨で覆す。

それが、霧雨魔理沙の目指す、普通サイキョウの魔法使いの在り方なのだから。

「無限に再生するんだったら、それ以上の威力で蹂躪するだけだぜ！」

突き出される掌。彼の作り出した、小型八卦炉ミが起動する。

念に従い、光熱の奔流が魔砲使いの全身を疾駆する。

かつての戦いで理解したように。

この術は、「光を操作する」なんて上品なものではなく。

ただ一途に。

全ての力を一点に収束させ。

一心不乱に想いを貫くだけの術。

ああ、それは全くある感情に似て。

それ故、この符は名づけられたる。

この想いは、自分が彼の後継である証。

自分が、人間として最強を目指すとした印。

「恋符 「マスタースパーク」！！」

不死ホノオを、恋心ヒカリが白く塗り替え、消し飛ばし。

道具屋「森近 霖之助」

落下しながら、夢を見ている。

朦朧とする意識の中、少女は、そう理解した。

そう。これは夢だ。

目の前の不死者を倒すため、自分は筭を捨てて、堅い地面に身を打ち付けるだけのはずなのだから。

真下に向けて撃ち放った光熱波の衝撃で、落下死だけは免れるだろうが、怪我はするだろう。

だから。

自分を抱き止めた、この暖かな腕も。

埃と紙の匂いの染み付いた、この懐も。

きつと、痛みが生み出した、幻覚の類だと。

そう、霧雨魔理沙は、漠然とした思考を回転させる。

機能のままに動いていただけの道具を、正しく壊してくれた人。

己の魔法使いとしての生を、自分に笑って譲ってくれた銀の髪の半妖半人。

森近霖之助。

彼女に、名と術と、人間であることをくれた人。

そもそも、夢に決まっているのだ。

自分が彼の腕の中にいて、顔を覗き込まれているなんて。

彼が、皮肉も言わず、こんな笑顔を向けてくれるなんて。

そんなこと、霧雨の家を出てから一度もなかったはずだから。

これはきつと、霧雨魔理沙の甘えが生んだ、甘くて微温い夢の類だ。

そう結論付け、少女は、自分を抱きとめる腕に、力を込めた。

どっせ、夢の中なのだ。

「香霖……。わたし、がんばったぞ？」

そんなときくらい、彼に甘えても構うまい、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3170q/>

東方双翼想

2011年2月7日00時11分発行